

ジョン・ミルトン作「リシダス」

— 翻訳 —

稲 用 茂 夫*

【要 旨】 英国十七世紀詩人ジョン・ミルトンによるケンブリッジ大学クライスト学寮での学友エドワード・キングを哀悼する牧歌的哀歌「リシダス」の日本語訳である。翻訳にあたり、成立事情などについての簡略な紹介を付加した。

【キーワード】 ジョン・ミルトン 「リシダス」 牧歌 田園詩 哀悼詩
エドワード・キング ケンブリッジ大学 日本語訳

はじめに（本作品の成立事情など）

この詩の執筆までのいきさつについては、作者自身の付けたまえがきの弁明の二文にあるとおりであるが、時間的にも空間的にも遠く、当時の事情をくわしく知らない日本人にとってはさらに若干の情報が不可欠と考えられるので、はじめに補足としての意味で簡略な解説を付加しておきたい。

英国ケンブリッジ大学のクライスト・コレッジ（学寮）にダブリン出身のエドワード・キング (Edward King, 1612 - 1637) という学生がいた。アイルランドの英国官吏ジョン・キング (Sir John King of Yorkshire) の息子で、詩人ジョン・ミルトンより4歳下、学年では2年下であった。(エドワード・キングの学士号 B. A. 取得 (学部課程卒業) は 1630 年で、修士号 M. A. 取得 (大学院修士課程修了) は 1633 年である。) 同大学卒業後のミルトンがロンドン郊外のハマースミスにこもり、気ままな勉強に励んでいた頃、この後輩は母校クライスト学寮の特待生 (fellowship in 1630) となり、教員として学生の指導も行っていた。いずれ教会の聖職者兼学者となる予定であったらしい。

1637年の夏の休暇、エドワード・キングは帰省のため、チェスターから出港した。ディー川がアイルランド海峡にさしかかる沖合でその船は岩礁に衝突し、やがて沈没した。8月10日のことであった。予期せぬ海難事故のため、将来が有望視されていたキングはその生涯を25歳の若さで閉じた。

その翌年1638年、学友たちはこの夭折の秀才に二部構成の追悼文集を献じた。ミルトンの寄稿による「リシダス」は、その文集第二部英語による追悼詩篇13篇 (Obsequies to the memorie of Mr. Edward King, Anno Dom. 1638) の最後に収められた作品 (無題で、作者としての署名

平成21年6月1日受理

*いなもち・しげお 大分大学教育福祉科学部英語英文学教室

は単に J. M. のみ)である。この作品については元の手書き原稿が現存し (The Trinity College Manuscript ケンブリッジ大学トリニティ・コレッジ図書館蔵)、それには“Novemb: 1637”と記してあることから、執筆は 1637 年 11 月と特定される。

構成について

牧歌・田園詩というジャンルは、大まかな議論として「現実からの分離」の意識をもつ。それが牧歌の一つの特徴であるとすれば、本作品においてイングランドの地名の挿入という、作者ミルトンが時間・空間の限界をともなった現実の世界を導入することには、単なる牧歌の枠を越えた特別の意図が介在すると考えるべきであろう。ここでの「水」は主役リシダス (という牧人の名前で登場するエドワード・キング) の生命を奪った元凶として、冷酷な現実を象徴する。そしてこういう緩衝の挿入部があればこそ、各部の最終部、つまり「詩的高揚感」の部分において、およそ牧歌風からは遠い、別種の声、すなわち叙事詩の雰囲気の導入が可能となるのではないか。

牧歌形式の追悼詩「リシダス」を読むにあたっては、この作品の構造が導入部 (14 行) と結論部 (8 行) を除けば、詩神 (ミューズ) への呼びかけ (invocation) で始まる三部分から成り (15-84 行, 85-131 行, 132-185 行)、この三部分はそれぞれが「詩的高揚感」で締めくくられ、その三回にわたる「累積的効果」が主役リシダスの神格化の美を生み出すように意図されていることを考慮に入れなければならない。各部分の牧歌風の呼びかけと「詩的高揚感」との間には、イングランドの、しかも「水」に関連をもつ地名をともなう中間部が挿入されている。

第一部 (15-84 行) では牧歌風の導入部の後で、詩人音楽家オルペウスがトラキアの女たちの怒りを買って、殺されて死体を八つ裂きにされ、ヘブロス川に投げ捨てられ、やがてその頭部と豎琴は海を越えてレスボス島に流れ着いたという伝説に触れる。「水」が「詩人」志望のリシダスの生命をもてあそぶことの寓意化である。詩神フォイボス (アポロン) が現れ、超人間的な声をもって、詩人としての名声を最後に授けるのは「すべてを裁く大神ユピテル」なのだ、と論ずることで、現実を超越する世界の存在が暗示される。

第二部 (85-131 行) では牧歌風の呼びかけの後、海神トリートーンとイングランドのカム川の老守護神ケイマスが現れて、リシダスの死因について「水」に詰問する。

続いて聖ペテロが登場し、預言者的な語勢で、聖職者階級の墮落を糾弾する。聖ペテロはガリラヤ湖を (不完全ながら) 歩いた人物である (マタイ福音書、第 14 章 22 節-33 節)。つまり「リシダス」の文脈に即して言えば、「水」に象徴される時間支配の現実に、不完全ながらも打ち勝ったという伝説の持ち主である。聖ペテロは、「水」が象徴する現実の世界を詰問する。この場合の現実の世界は、宗教界であるが、その世界がどうしてリシダスを受け入れなかったのか、と聖ペテロが詰問するのである。(エドワード・キングは聖職に就くはずであった。) 聖ペテロは、リシダスを受け入れるに足る真に聖なる教会は、神の裁き—「あの両手使いの剣」(130 行) 一の後に到来する、と考える。

第三部 (132-185 行) はリシダスが黙示録的な救いの世界に迎え入れられる部分である。コーンウォール西南端の聖ミカエル山に呼びかけ、その付近の海底を訪れているかも知れぬリシダスのために嘆き給え、と歌われる。

この第三部では、現実を象徴するイングランドの地名が言及されても、船乗りの守護者とされた大天使聖ミカエルの山であり、その直後には、溺死体を浜へ運び上げてくれるイルカーキ

リストの象徴一が登場する。

「リシダス」は、詩と宗教から放逐された魂が、神の国に迎え入れられる、その彷徨の図式をもつ。エドワード・キングは詩人＝聖職者を志して、夭折し、初志を貫徹できぬまま果てた。この挽歌は、その亡き友に対する真摯の詩なのである。

「リシダス」の中に、牧歌からキリスト教的な叙事詩への傾斜を見てきた。主人公リシダスが叙事詩的な高まりを三たび経験しながら、最後に黙示録的な世界に迎え入れられるとされるのは、叙事詩的表現によってリシダスを最大級に讃え得ることを詩人がよく意識していたことを表していると言えるのではないか。「水」の完全支配の世界に発して、「水」の支配を不完全ながら脱する世界を通り、最後に「水」の支配をまったく受けない世界へと、リシダスはこの三世界を遍歴し、徐々に上昇して、リシダス（すなわちエドワード・キング）は「海浜の守護神」の地位を占めることになる。かくして「リシダス」は叙事詩のもつ「探究の形式」を一つの作品でありながら三回までも繰り返す構成を示しているのである。

ケンブリッジ大学の学部課程を卒業（B.A. 1629年3月）し、さらに同じクライスツ学寮の大学院修士課程を修了（M.A. 1632年7月）して、とくに定職に就くこともせず、父親のもつ田舎（ハマースミスおよびホートン）の別荘で古典の勉強や詩作にふけて月日を送り、将来の詩人を目指しての修業の時期を過ごしたミルトンは幸せであったにちがいない。

1637年4月初めに母親が死去した。父親の理解もあって、翌年1638年初夏5月に従僕一人を連れて、当時の若者らしく、教養の総仕上げのためのイタリアへの大陸旅行（grand tour）に出かけた。15ヶ月を過ごして1639年7月末にはロンドンに戻っている。このときまでをミルトンの青春期、牧歌的生活時代と呼ぶことができるだろう。実際この時期には牧歌的小品が多く残されていて、1630年代イングランドの牧歌・田園詩趣味（pastoralism）が反映している形で、ミルトンもその一般的風潮の一翼をになっていたわけである。しかし、ミルトンの場合、特徴的なのはキリスト教的世界観を基調としたところである。また、ミルトンにおいては、この時期に詩人としては最高の地位の叙事詩人として立つ準備をしていたことも重要で、その叙事詩への模索においても、キリスト教的世界観と一体のものである。

「リシダス」は大学での友人の夭折を悼んだ牧歌的哀歌であるが、叙事詩的な構想によって組み立てられ、構造的にはピューリタンの峻厳さをもつ詩行が、そののどかな田園詩趣味を押さえつけている。英国国教会の聖職者たちの貪欲なありさまについて、使徒ペテロが叱責する部分は語調も激しく、このピューリタンの調子が晩年の叙事詩の雰囲気につながる。結びの行「明日はさわやかな森、新しき牧場へ向かおう」からは、その明日の森と新しい牧場がいかなるものかはこのときミルトン自身にも不明であったとしても、牧歌・田園詩の世界を出て、さらなる別の世界での可能性を探りたいという作者の心情がうかがえる。

韻律について

この作品は、少数の1行6音節（強勢は3カ所）のもの以外は、主として1行10音節（強勢は5カ所）の詩行から成り、最後の8行を除くほかの部分は一定の規則によらず、押韻（rhyme）と無韻（blank verse）とを混用した独特の詩形（イタリアのカンツォーネ詩形）を用いている。ときおり、行の最後で韻を踏まないこともあるが、全体的には押韻がなされており、一見不統一ながらも、それでいて詩全体の調和は保たれた形に作り上げられている。最後の締めくくり

となる8行は弱強調五歩格 (iambic pentameter) の規則正しい詩形で、押韻形式も abababcc に整えられていて、作品全体をまとめる書き方となっている。

〔訳文〕

この独唱哀悼詩において、作者は1637年チェスターからの航行中にアイルランド海上での遭難により亡くなった学友を哀悼する。合わせて当時腐敗の全盛を極めた我が国の聖職者の破滅を預言する。

もう一度、月桂樹よ、もう一度、
常緑のツタをまとった色濃いミルテの樹よ、
お前たちの熟し切る時を待ちもせず、ぼくは来た、
お前たちの堅い実を摘みに、
心染まぬ荒々しい指で
お前たちの葉を散らすため。
にがい、つらい必要がぼくを強いて
お前たちの季節を狂わせる——
リシダスが死んだのだ、時ならずして逝ってしまったのだ。
若いリシダス、並ぶ者なきリシダスが。
誰か彼のために歌わぬ者があるか。
みずから調べ高い詩歌に秀でた彼が
水の棺に、涙する人もなく漂い
ひからびる寒風に、弔いの歌もなく
もてあそばれてはならない。

歌い始めよ、ユピテルの神座の下から
湧き出る聖なる (アガニッペの) 泉の詩女神 (ミューズ) たちよ、
いざ、歌い始めよ、音高く弦を打鳴らすのだ。
去れ、むなしい拒絶、遠慮の口実。
いつの日か代わって心やさしい詩人が
ぼくの定め墓に冥福の言葉を投げかけ
通りがかりの足を止めて
ぼくの黒い経帷子によき平和を念じてくれよう。

同じ丘に育てられ、同じ羊の群れを
泉に木陰に小川にやしなつたぼくたち二人。
開けかかる曙のまぶたのもと、まだ丘の芝草が
定かに見えて来ぬうちに、
二人で一緒に野に羊を追い、二人で一緒に
アブの吹く暑くるしい角笛を聞き、
日暮れに昇った輝く明星が
ついにはあなたの西の空に車輪を傾けるまで
さわやかな夜露を羊たちに吸わせたものだ。

15

25

ひなびた調べもまた、熟してはおらず、
 表笛に合わせて乱暴な半獣サチュロスたち（学友）が踊れば、
 蹄の割れた牧神ファウヌスたちも陽気な響きに慕い寄り
 ダミータス老人（教授）さえぼくたちの歌は好きだった。

だが、おお、この悲しい変わり様。

37

君はいない、行ってしまつて二度と帰つて来ない！
 君を、羊飼（リシダス）よ、君を、森も野の洞穴も、
 生い茂るタチジャコウ草やツル草とともに、
 こだまとともに、すべて悲しんでいる。
 ヤナギも緑なすハシバミの林も、もはや
 君のやさしい歌声にうれしく葉を揺する
 姿を見せはしない。

バラをむしばむ尺取毒虫のように、
 乳を離れて草を食む子羊を犯す病虫のように、
 また、白サンザシが咲き初める頃
 あでやかに着飾る花々の蕾を襲う霜のように、
 リシダスよ、君の死はそのように痛ましく
 羊飼たちの耳を打つ。

水の精（ニュンペー）たちよ、どこにいたのか、
 非情な海がお前たちの寵愛したリシダスの
 頭の上に閉じた時に。

50

あの名にしおうドルーイド教の
 古き詩人たちの横たわる断崖にも
 モーナの山のけわしき高嶺にも
 ディー川の霊妙な流れのほわりにも
 お前たちは遊んでいなかった。
 ああ、愚かしい夢だ、
 もしもお前たちがそこにいたとして、それで何ができただろう。
 ミューズの女神（カリオペー）自身ですら、おのが息子、
 オルペウスの死のために、「自然」すべてが悲しんだ
 かの魅惑の詩人のために何ができたというのだ、
 すさまじくわめき狂った女たちが
 血塗られた彼の頭をへブロス川の急流に沈めて
 レスボス島の浜辺へと流し去った時に。

ああ、絶え間なく心を配りながら
 ひとに顧みられない貧しい牧羊のわざに励み
 情けを知らぬミューズに一心に思いを寄せ
 精進しても何になるのか。ほかの者たちと同じに
 森かげにアマリュリスと戯れ、乙女ネアイラの
 乱れ髪をもてあそんだ方がましではないか。

64

名声こそ清い心を駆り立てて

(ああ、優れた精神の最後の弱み)

悦楽をさげすみ、労苦の日々を送らせる拍車。

しかもその美しい実りを見出して

今や燦然と栄光の中へ輝き出ようとするとき

あの盲目の運命の女神(アトロポス)が忌まわしいはさみをもって
現れ、たまゆらの命の糸を断ち切る。

「だが名声を断ちはせぬ」とそのとき

ふるえるぼくの耳に答えた詩神フォイボス(アポロン)の声、

「名声は現世の土壤に育つ木にあらず、

また塵の世に際立って輝く金箔にもあらず、

広く人のうわさの中にもあらず。

それは、すべてを裁き給う大神ユピテルの

明晰な眼と厳正な証によって高きに栄えるもの、

人の業に大神のくだし給う最後の裁きの言葉こそ

天国において報われる名声と信ぜよ。」

おお、アレトウーサの泉よ、葦の音妙に鳴って

柔らかに滑りゆく高貴なミンキウスの川よ、

今の声はさらに厳かな調べを響かせた。

だが再びぼくは葦笛の歌にもどり

海神ネプトゥヌスに遣わされた使者(トリートーン)に耳傾ける。

彼は荒海にたずね、凶暴な風に問いただした、

ところが、風たちはまるで覚えがない。

賢き風神ヒポテースの子(アイオロス)も答えて、「私の土牢から迷い出た

一吹きは突風もない。空は穏やかに、

海は風いで、海の精パノペーがその姉妹たちと遊んでいた。

君の神聖な頭を深く沈め去ったのは

日蝕に造られ、不吉な呪いに艤装された

あの不吉な裏切りの、あの宿命の船であったのだ。」

次に、川の翁ケイマス(大学の象徴)が足を重く運んで現れる。

おぼろげな模様の刺繍で、縁には

あの血に滯れた花(ヒヤシンス)に似た悲しみの印をつけた、

葦のマントにスゲの角帽。

「おお、わしの最愛の息子を奪ったのは誰か。」

最後に現れ、最後に去ったのは

ガリラヤ湖の水先案内(聖ペテロ)。

手に持つのは二つの金属の重々しい鍵

(黄金の鍵は天の門を開き、鉄の鍵はしかと閉ざす)。

司教冠(マイター)をつけた髪を振り、彼は激しく叫んだ。

「若き羊飼いや、羊たちの檻に厚かましく

割り込み、よじ登って私腹を肥やす連中を
 お前の代わりに何人でも死なせたかった。
 かれらの心にあることはただ一つ、如何にして
 刈り入れの宴に連なってさもなくば掻き集めるか、
 如何にして優れた正客たちを追い出すか。
 盲目の口ども！ 牧羊の杖の持ち方も心得ず
 まことの牧羊者のわざをいささかも知らぬ者。
 何の用があらう、そのような者たちに。
 今を盛りとはびこる者らよ！
 気ままに吹き鳴らすそのひからびた歌は
 かすれて卑しい麦笛にきしみ、
 飢えて眼を上げる羊たちには餌もなく
 風にさらされ、毒露を吸って腫れてむくみ、
 身内より腐りはじめ、疫病をまき散らす。
 加えて、腹黒の狼が爪を磨いて
 日ごと凄まじく貪りくらう。——しかも声はなく。
 だが、門に立つ両手使いの剣が
 打つのは一度きりの、止めの一撃を構えている。」

戻ってくれ、(アルカディアの川の神) アルペウスよ、お前の流れを
 怯えさせた恐ろしい声は去った。
 帰って来てくれ、シチリアのミューズよ。
 谷間に呼びかけ、色とりどりの花々を
 ここへ手向けよと告げるのだ。樹々と浮かれた風と小川が
 やさしく囁きかわし、日焼けした狼星シリウスの
 視線も深くは届かぬすがすがしい谷間よ。
 緑の草に蜜のような露を吸うお前の眼、
 愛らしく色鮮やかな花たちを投げかけて
 この大地を春の色で紫色に染めてくれ。
 捨てられて死ぬ早咲きのサクラ草、
 房に花咲くキンポウゲ、薄色のジャスミン、
 純白のナデシコ、黒まだらのパンジー、
 まばゆいスマレ、ジャコウバラ、粹なスイカズラ、
 うなだれて憂い顔した黄色い丸輪桜、
 悲しげな飾りのすべての花をもっておいで。
 アマランスの美しさを、
 涙をたたえたスイセンの盃を、リシダスの
 横たわる月桂樹の棺に散り敷いてくれ。
 こうして、つかの間の気休めを得るために
 いたずらな物思いにはかなくも戯れるのだ。
 ああ、その間にも君は(君の屍骸が

いずこに打ち上げられたかは知らず)
 はるか遠い岸边に、とどろく波に洗われている。
 風の荒れ狂うへブリディーズの島々の彼方
 おそらくは逆巻く波の下、君は
 水底深く異形の化け物の住まう国を訪れているのか、
 あるいはまた、われらの涙の祈りはかなわず
 君はあの伝説のベレルス老人のもとに眠るのか。
 その山を守りつつ、ナマンコスとバヨーナの
 砦の方を見張る大いなる天使の姿——
 天使よ、今こそ故郷に眼を向けて、悲しみに溶けて涙を流せ、
 そして、ああ、イルカたちよ、幸薄かった若者を運んでくれ。

もう泣いてはならぬ、悲しみの羊飼いたちよ、もう泣いてはならぬ
 お前たちの悼むリシダスは、たとえ、
 水の底に沈み果てても、死んではいないのだから。
 昼の太陽もまた大海の寝床に沈む、しかもすぐ
 うなだれた頭をいやし、その光を整え
 新しい金色の輝きをもって
 朝の空の額の中に燃え上がる。
 そのようにリシダスもまた深く沈みながら、波の上を
 歩み給うたお方（キリスト）の御力によって高きに昇り、
 別の森かげ、別の小川のほとりに、
 濡れそぼった髪を澄んだ神酒ネクタルで洗い清め、
 歓喜と愛に満ちた柔和な幸いの天国に
 えもいわれぬ祝婚の歌を聞いている。
 そこに彼をもてなす天にいます全ての
 聖徒たち、おごそかにやさしく群れ集って
 歌い、歌いつつ栄光の中に舞い踊り、
 彼の眼から永久に涙を拭い去る。
 さあ、リシダスよ、もう羊飼いたちは泣かぬ。
 これからは心広い君は岸边の守護神となり、
 危難の海にさまよう者たち全てを
 ねんごろに導くのだ。

このように無骨な羊飼いは樅や小川に歌いかけた。
 静かな朝が灰色のサンダルを履いて去るのも知らず
 さまざまの葦笛をこまやかに奏でつつ
 胸に迫る思いをひなびた歌に歌ううち
 太陽はやがて西の入り江に身を浸して沈んだ。
 若者はついに立ち上がり、青いマントを振るった。
 明日はいざ、さわやかな森へ、新しい牧場へ向かおう。

註

原文について：

今回の翻訳の底本としたのは増補版となる 1673 年版ミルトン詩集の原文で、研究者向けの *John Milton's Complete Poetical Works, Reproduced in Photographic Facsimile*, ed. Harris Francis Fletcher, 4 vols. (Urbana, The University of Illinois Press, 1943), に所収の Vol. I, pp. 52-56 からである。現在「リシダス」を取り扱う場合の標準となる原文である。

ミルトンが生前に刊行した最終版による元の英文は以下に示す通りである。

Lycidas

In this Monody the Author bewails a learned Friend, unfortunately drown'd in his Passage from *Chester* on the *Irish* Seas, 1637. And by occasion fortells the ruine of our corrupted Clergie then in their height.

YEt once more, O ye Laurels, and once more
 Ye Myrtles brown, with Ivy never-sear,
 I com to pluck your Berries harsh and crude,
 And with forc'd fingers rude,
 Shatter your leaves before the mellowing year. [5]
 Bitter constraint, and sad occasion dear,
 Compels me to disturb your season due:
 For *Lycidas* is dead, dead ere his prime,
 Young *Lycidas*, and hath not left his peer:
 Who would not sing for *Lycidas*? he knew [10]
 Himself to sing, and build the lofty rhyme.
 He must not flote upon his watry bear
 Unwept, and welter to the parching wind,
 Without the meed of som melodious tear.
 Begin then, Sisters of the sacred well, [15]
 That from beneath the seat of *Jove* doth spring,
 Begin, and somewhat loudly sweep the string.
 Hence with denial vain, and coy excuse,
 So may some gentle Muse
 With lucky words favour my destin'd Urn, [20]
 And as he passes turn,
 And bid fair peace be to my sable shrowd.
 For we were nurst upon the self-same hill,
 Fed the same flock, by fountain, shade, and rill.
 Together both, ere the high Lawns appear'd [25]

Under the opening eye-lids of the morn,
 We drove a field, and both together heard
 What time the Gray-fly winds her sultry horn,
 Batt'ning our flocks with the fresh dews of night,
 Oft till the Star that rose, at Ev'ning, bright [30]
 Toward Heav'ns descent had slop'd his westering wheel.

Mean while the Rural ditties were not mute,
 Temper'd to th' Oaten Flute,
 Rough *Satyrs* danc'd, and *Fauns* with clov'n heel,
 From the glad sound would not be absent long, [35]
 And old *Damætas* lov'd to hear our song.

But O the heavy change, now thou art gon,
 Now thou art gon, and never must return!
 Thee Shepherd, thee the Woods, and desert Caves,
 With wilde Thyme and the gadding Vine o'regrown, [40]
 And all their echoes mourn.

The Willows, and the Hazle Copses green,
 Shall now no more be seen,
 Fanning their joyous Leaves to thy soft layes.
 As killing as the Canker to the Rose, [45]
 Or Taint-worm to the weanling Herds that graze,
 Or Frost to Flowers, that their gay wardrop wear,
 When first the White thorn blows;
 Such, *Lycidas*, thy loss to Shepherds ear.

Where were ye Nymphs when the remorseless deep [50]
 Clos'd o're the head of your lov'd *Lycidas*?
 For neither were ye playing on the steep,
 Where your old *Bards*, the famous *Druids* ly,
 Nor on the shaggy top of *Mona* high,
 Nor yet where *Deva* spreads her wisard stream: [55]

Ay me, I fondly dream!
 Had ye bin there — for what could that have don?
 What could the Muse her self that *Orpheus* bore,
 The Muse her self, for her enchanting son
 Whom Universal nature did lament, [60]
 When by the rout that made the hideous roar,
 His goary visage down the stream was sent,
 Down the swift *Hebrus* to the *Lesbian* shore.

Alas! What boots it with uncessant care
 To tend the homely slighted Shepherds trade, [65]

And strictly meditate the thankles Muse,
 Were it not better don as others use,
 To sport with *Amaryllis* in the shade,
 Or with the tangles of *Neæra's* hair?
Fame is the spur that the clear spirit doth raise [70]
 (That last infirmity of Noble mind)

To scorn delights, and live laborious dayes;
 But the fair Guerdon when we hope to find,
 And think to burst out into sudden blaze,
 Comes the blind *Fury* with th' abhorred shears, [75]
 And slits the thin spun life. But not the praise,
Phœbus repli'd, and touch'd my trembling ears;

Fame is no plant that grows on mortal soil,
 Nor in the glistering foil
 Set off to th' world, nor in broad rumour lies, [80]
 But lives and spreads aloft by those pure eyes,
 And perfet witnes of all-judging *Jove*;
 As he pronounces lastly on each deed,
 Of so much fame in Heav'n expect thy meed.

O Fountain *Arethuse*, and thou honour'd flood, [85]
 Smooth-sliding *Mincius*, crown'd with vocall reeds,
 That strain I heard was of a higher mood:

But now my Oate proceeds,
 And listens to the Herald of the Sea
 That came in *Neptune's* plea, [90]
 He ask'd the Waves, and ask'd the Fellon winds,
 What hard mishap hath doom'd this gentle swain?

And question'd every gust of rugged wings
 That blows from off each beaked Promontory;
 They knew not of his story, [95]

And sage *Hippotades* their answer brings,
 That not a blast was from his dungeon stray'd,
 The Air was calm, and on the level brine,
 Sleek *Panope* with all her sisters play'd.
 It was that fatall and perfidious Bark [100]
 Built in th' eclipse, and rigg'd with curses dark,
 That sunk so low that sacred head of thine.

Next *Camus*, reverend Sire, went footing slow,
 His Mantle hairy, and his Bonnet sedge,
 Inwrought with figures dim, and on the edge [105]

Like to that sanguine flower inscrib'd with woe.
 Ah; Who hath reft (quoth he) my dearest pledge?
 Last came, and last did go,
 The Pilot of the *Galilean* lake,
 Two massy Keyes he bore of metals twain, [110]
 (The Golden opes, the Iron shuts amain)
 He shook his Miter'd locks, and stern bespake,
 How well could I have spar'd for thee young swain,
 Anow of such as for their bellies sake,
 Creep and intrude, and climb into the fold? [115]
 Of other care they little reck'ning make,
 Then how to scramble at the shearers feast,
 And shove away the worthy bidden guest;
 Blind mouthes! that scarce themselves know how to hold
 A Sheep-hook, or have learn'd ought els the least [120]
 That to the faithfull Herdmans art belongs!
 What recks it them? What need they? They are sped;
 And when they list, their lean and flashy songs
 Grate on their scrannel Pipes of wretched straw,
 The hungry sheep look up, and are not fed, [125]
 But swoln with wind, and the rank mist they draw,
 Rot inwardly, and foul contagion spread:
 Besides what the grim Woolf with privy paw
 Daily devours apace, and nothing sed,
 But that two-handed engine at the door, [130]
 Stands ready to smite once, and smite no more.
 Return *Alpheus*, the dread voice is past,
 That shrunk thy streams; Return *Sicilian* Muse,
 And call the Vales, and bid them hither cast
 Their Bells, and Flourets of a thousand hues. [135]
 Ye valleys low where the milde whispers use,
 Of shades and wanton winds, and gushing brooks,
 On whose fresh lap the swart Star sparely looks,
 Throw hither all your quaint enameld eyes,
 That on the green terf suck the honied showres, [140]
 And purple all the ground with vernal flowres.
 Bring the rathe Primrose that forsaken dies.
 The tufted Crow-toe, and pale Gessamine,
 The white Pink, and the Pansie freakt with jeat,
 The glowing Violet. [145]

The Musk-rose, and the well attir'd Woodbine,
 With Cowslips wan that hang the pensive head,
 And every flower that sad embroidery wears:
 Bid *Amarantus* all his beauty shed,
 And Daffadillies fill their cups with tears, [150]
 To strew the Laureat Herse where *Lycid* lies.
 For so to interpose a little ease,
 Let our frail thoughts dally with false surmise.
 Ay me! Whilst thee the shores and sounding Seas
 Wash far away, where ere thy bones are hurl'd, [155]
 Whether beyond the stormy *Hebrides*
 Where thou perhaps under the whelming tide
 Visit'st the bottom of the monstrous world;
 Or whether thou to our moist vows deny'd,
 Sleep'st by the fable of *Bellerus* old, [160]
 Where the great vision of the guarded Mount
 Looks toward *Namancos* and *Bayona's* hold;
 Look homeward Angel now, and melt with ruth.
 And, O ye *Dolphins*, waft the haples youth. [165]
 Weep no more, woful Shepherds weep no more,
 For *Lycidas* your sorrow is not dead,
 Sunk though he be beneath the watry floor,
 So sinks the day-star in the Ocean bed,
 And yet anon repairs his drooping head,
 And tricks his beams, and with new spangled Ore, [170]
 Flames in the forehead of the morning sky:
 So *Lycidas* sunk low, but mounted high,
 Through the dear might of him that walk'd the waves
 Where other groves, and other streams along,
 With *Nectar* pure his oozy Lock's he laves, [175]
 And hears the unexpressive nuptial Song,
 In the blest Kingdoms meek of joy and love.
 There entertain him all the Saints above,
 In solemn troops, and sweet Societies
 That sing, and singing in their glory move, [180]
 And wipe the tears for ever from his eyes.
 Now *Lycidas* the Shepherds weep no more;
 Henceforth thou art the Genius of the shore,
 In thy large recompense, and shalt be good
 To all that wander in that perilous flood. [185]

Thus sang the uncouth Swain to th' Okes and rills,
 While the still morn went out with Sandals gray,
 He touch'd the tender stops of various Quills,
 With eager thought warbling his *Dorick* lay:
 And now the Sun had stretch'd out all the hills,
 And now was dropt into the Western Bay;
 At last he rose, and twitch'd his Mantle blew:
 To morrow to fresh Woods, and Pastures new. (1638, 1645, 1673)

[190]

参考文献

現在までのところ、日本語による「リシダス」の翻訳には以下のものがある。

- 1) からたちのや(乙骨三郎)訳「リシダス」(『万年艸』巻第一, 明治35年10月)
- 2) 河口真一訳「リスィダス」(『三田文学』第15巻第11号, 大正13年11月)
- 3) 竹友藻風訳註『ミルトン, リシダス』(文教閣, 昭和9年5月)
- 4) 町野静雄訳「リシダス」(『ミルトン・人生の書』金星堂, 昭和13年8月)
- 5) 高橋康成訳「リシダス」(『世界名詞集大成』9, 平凡社, 昭和34年10月)
- 6) 岡沢 武訳「リシダス」(『英文学の三大哀歌』篠崎書林, 昭和48年1月)
- 7) 小泉義男訳「リシダス」(『会津短期大学学报』第33号, 昭和51年3月)
- 8) 宮西光雄「ミルトン『リシダス』の訳詩」(『文学と評論』第9号, 昭和52年12月)
- 9) 宮西光雄訳「リシダス」(『ミルトン英詩全訳集』上巻, 金星堂, 昭和58年10月)

John Milton: *Lycidas*

— A Japanese Translation —

INAMOCHI, Shigeo

Abstract

John Milton's English pastoral elegy *Lycidas* translated into the Japanese language with his original and final English text in 1673.

The translator has also added a short introduction to this poem for readers' appreciation in Japan.

【Key words】 John Milton, *Lycidas*, pastoral, elegy, Edward King, Christ's College, Cambridge University, Japanese translation